

## 日本語教育と国語教育の接点

—明日の言語教育をつくる—

大橋 敦 夫

### 1. はじめに

1983年に留学生10万人計画が公表されて以来、外国人に対する日本語教育がにわかに脚光を浴びている。外国人自身による自主的な日本語学習は、遠く中世は、キリシタンの時代にまで遡ることができる<sup>(1)</sup>。が、それはごく限られた範囲で行なわれたものであり、現在のような地球的規模での展開は、かつては予想だにできないものであった。

今や「国際化」のかけ声とともに、世界の各地で日本語学習ブームといってよい状況が発生している。当初、一部に日本人ならば誰でも気軽に日本語が教えられといった風潮があったが、日本語教育能力検定試験の実施等により、ようやく日本語教育と国語教育とは別種のものと一般に認識されるようになってきた。

とはいえ、対象はあくまで同一の言語である。両者の教育・研究は、独立に行なわれるよりも、互いにあい補っていくほうが、実りが大きい。そこで、本稿においては、日本語教育と国語教育の接点を探り、明日の言語教育をつくる指針をつかみたい。

### 2. 「国語教育」と「日本語教育」の相違点

■表1. 「国語教育」と「日本語教育」の相違点

	国 語 教 育	日 本 語 教 育
(1) 教 師	日本語を母語とする人であるのが通常である。	日本語の学習者であった人。日本語を母語としない人の場合が効果的であることも多い。
(2) 学習期間	誕生以来の長い間に、社会習慣として文化と共に身につけてきた。	限られた時間の中で習得されるのが普通。
(3) 学習法・教授法	習うより慣れろ、という格言が真実であることがある。	自覚的・規則的に言葉を捉え直して学ぶことが不可欠。
(4) 教育上の配慮	学習上の難点などを特定し、言葉の特性を生かした教育が可能。	学習者の母語によって、教育上の留意点が異なってくる。

（松井嘉和氏『外国人から見た日本語』日本教文社 1992.8 P.210）

日常的な言語表現では、「国語」と「日本語」、「母語」と「母国語」、「母国語」と「公用語」をそれぞれ区別して使うことが少ない。それは、多くの日本人にとって、

「国語」＝「日本語」＝「母語」＝「母国語」＝「公用語」

というような、あたかも惑星直列のような図式が出来上がっているためであろう。

たしかに日本という国にあっては、言語的にはほぼ単一であるため、上のような図式が成り立つ<sup>(2)</sup>。国語学・言語学上の術語としては、厳密に区別されているこれらの語を、同義語のようにしてしまう言語状況というのは、世界的にも例が少ない。この点において、日本語は確かに「特殊」な存在である<sup>(3)</sup>。

したがって、「国語教育」と「日本語教育」の違いが認識されにくいのも無理がない。しかし、学び手の学習目標、そして何より、「国語」が第一言語（母語）であるか否かによって、その学習状況は大いに違ってくるのである（表1参照）。

そして、この違いを見つめることは、両者に有益な発展をもたらす。ことに日本語教育から国語教育に向けての示唆には、従来の国語教育のさまざまな面に変革を迫るものが、多く見出される。次章では、主に日本語教育の分野で取り上げられているが、国語教育においても有益と思われる諸点を挙げてみる。

### 3. 日本語教育から国語教育への提言

日本語教育からの提言をより確実なものにするため、まず国語教育の現状を振り返ってみたい。そこで、大学生を対象に、問題となるいくつかの項目についてアンケート調査を実施した（次頁参照）<sup>(4)</sup>。その結果を折々取り上げながら、問題点を検討していく。

#### (1) 音声・音韻……「スピーチ」「ディベート」／面接／「聴く」ことについて

「スピーチ」「ディベート」とも、近年盛んになっており、指導要領でも音声言語の指導が重視されているので、今後の一層の充実が期待される（Q6参照）。自分の考えを自分なりの言葉で表現できるようになるためには、場の設定が欠かせない。アメリカの言語教育で行なわれている「ショー アンド テル（Show & Tell）」のように、ゆくゆくは初等教育の段階から実践したい。

面接も音声言語表現として、大切なものである。受験のテクニックといった面からではなく、スピーチの応用として位置付け、練習を積みたい。

「聴く」ことの教育はなおざりにされているようである。ひところ大学生の私語が問題となったが、「聞こえても聴けない」学生が増えているのではないだろうか。内容構成を意識しながら聴き取るノウハウを国語教育において導入することが、解決策の一つになると考えられる。

#### (2) 文字・表記……漢字学習／ローマ字教育について

非漢字圏の日本語学習者ジャック＝ハルベン氏によって作成された『新漢英字典』（研究社 1990）は、画期的な労作である。部首分類によらず、漢字を分解図形に見立てた独自の分類案を示している。それによると、部首をまったく知らずとも、目指す漢字が引ける。字形認識の多様性を示唆しており、漢字教育の新たな展開が期待できる。（例えば、いわゆる漢字嫌いの生徒の意欲を引き出すことができそうである。）

# 国語の授業内容に関するアンケート

(上智大学生(文・法・経・外・理工学部) 87名……1994.10.14調査)  
(上田女子短大生(国文科) 132名……1994.10.17調査)

Q.1 小学校の国語の時間にローマ字を習いましたか。

YES NO	上智大学生	上田女子短大生
はい	75 (86%)	126 (95%)
いいえ	12 (14%)	5 (4%)
未回答		1 (1%)

方 式	上智大学生	上田女子短大生
ヘボン式	29 (39%)	30 (24%)
日本式	3 (4%)	21 (17%)
訓令式	3 (4%)	22 (17%)
不 明	40 (53%)	53 (42%)

Q.2 漢字練習はどのようにおこないましたか。(複数回答)

方 法	上智大学生	上田女子短大生
a. 同じ文字を何回も書く	59 (68%)	83 (63%)
b. 熟語を列挙する	17 (20%)	23 (17%)
c. その他	12 (14%)	5 (4%)
a+b	11 (13%)	23 (17%)

Q.3 文法(口語)の授業は楽しかったですか。

感 想	上智大学生	上田女子短大生
a. 楽しかった	18 (21%)	11 (8%)
b. 楽しくなかった	31 (36%)	33 (25%)
c. どちらでもない	36 (41%)	88 (67%)
未回答	2 (2%)	

Q.4 文法(文語)の授業は楽しかったですか。

感 想	上智大学生	上田女子短大生
a. 楽しかった	14 (16%)	9 (7%)
b. 楽しくなかった	41 (47%)	48 (36%)
c. どちらでもない	32 (37%)	75 (57%)
未回答		1 (1%)

Q.5 作文の授業は楽しかったですか。

感 想	上智大学生	上田女子短大生
a. 楽しかった	25 (29%)	33 (25%)
b. 楽しくなかった	30 (34%)	38 (29%)
c. どちらでもない	31 (36%)	61 (46%)
未回答	1 (1%)	

Q.6 スピーチやディベートを授業等で実践したことはありましたか。

スピーチ	上智大学生	上田女子短大生
あ る	31 (36%)	47 (36%)
な い	56 (64%)	83 (63%)
未回答		2 (2%)

ディベート	上智大学生	上田女子短大生
あ る	26 (30%)	25 (19%)
な い	61 (70%)	97 (73%)
未回答		10 (8%)

さらに、漢字練習に工夫を凝らしたい（Q2参照）。同じ文字ばかりを書き連ねるよりも、その漢字を用いる熟語を多く学ぶようにしたい。語構成を意識した漢字練習は、語彙を豊富にすることができる。

ローマ字教育を実施していない場合もあるようだが（Q1参照）、入門期の日本語学習に用いたり、公共的な情報サービスの分野でも必要性が高まっている。綴りの方式には、検討の余地があるが、分かち書きにおいては文法意識の覚醒も期待でき、言語感覚の鍛錬にもなる。きちんと時間をとって練習しておきたい。

### (3) 語 彙……外来語について

カタカナ外来語の氾濫は、しばしば問題にされるところである。日本語学習者のみならず、当の日本人にとっても意味不明の語が多い。濫用に荷担せず、明治期のようにはいくまいが、和語・漢語を基軸にした造語法を大切にしたい。これは、日本語の語彙を先細りさせないためにも欠かせないことである。

### (4) 文 法……日本語教育文法の成果取り入れ

作文とともに人気のないものだが（Q3・4参照）、日本語教育で実践している誤文訂正を紹介したり、個々の語の使い分けを用例から考えるなど、語法面の演習を取り入れてみたらどうだろうか。

### (5) 文 章……作文／手紙／速読について

文芸的な文章を書くこともよいが、まずは、実用的な文章作成において、明快な表現を追求することが基本である。

作文は、教員の負担は大きくなるが、コメント付きの添削で返却するようにしたい。生徒が楽しいと感じるか否かは、作文提出後の教員の努力によるところが大きい（Q5参照）。作文の授業が楽しかったとの回答の中には、「先生の講評を読むのが楽しみだった」というものが数例あった。これに力を得て奮起したいものである。

手紙については、中世の寺子屋教育以来、初等教育の中で重視されてきたものである。が、現在の国語教育の中ではきちんと扱われていない。実用的教育を軽視する向きもあるが、手紙を書く必要性は生涯を通じて減る事はない。しっかりした教科書で学びたいものである<sup>(5)</sup>。

速読についても、現行の国語教育の中では行なわれていないが、これからの文字情報処理量の増加を睨みながら導入を検討する必要があるだろう。英語・コリア語の速読に関するノウハウには、学ぶべき点が多いと思われる。

### (6) 方 言……共通語との共存について

本来、各地の方言は、対等で相対的關係にあるものである。が、かつての国語教育で展開された方言撲滅運動の名残か、未だに一部の地域の方言については、特定のイメージが付されている。そして、話者自身が自分の言葉に自信がもてないでいる場合もある。

幸い、近年はマスコミを中心として、方言をいとおしみ、かつ楽しむもうとする気運が高まっている。共通語に加えて、方言（それぞれの土地の言葉）も話せるということは、

いわば日本語におけるバイリンガルを実現しているわけである。それは、一つの事象に対して複数の表現を持っていることになり、異質な人物・物事に対する寛容的な態度を身につけることにつながる。その意味で、日本語学習者としての経験を生かし、現在、山形弁研究家を自称して活躍するダニエル＝カール氏の存在意義は大きい。

#### (7) 日本語の特質……外国語教科との関係

必修外国語との対照研究を折々に実践したい。生徒の日常的な学習においては、国語の予習時よりも、たとえば英文和訳の際に国語辞典を引く回数の方が多いのではないだろうか。とすれば、英語の学習を通じて日本語を見直してもいるのである。語義の対照を皮切りに、それぞれの言語文化のありように目を向けると深みのある学習となろう<sup>(6)</sup>。

余裕があれば、諸言語との比較に進むと良い。そこに日本語以外の物の見方・発想を学ぶ契機が生まれ、より複眼的思考が行なえるようになる。

#### (8) 文章教材……テーマ選びについて

国際理解・異文化理解をテーマとする教材を積極的に採用していきたい。多言語状況を日常的に経験していない日本人は、行動・判断基準が他者にあり、何事も他人と同じで安心するという心性を持っている。これは、同質の集団内で生きていく知恵でもある。が、行き過ぎると、自分とは異質な人を許容できなくなる可能性が生じる。日本語教育の目標には、言語能力の獲得もさることながら、他者への共感ということが、その根底にあると思う。教材を通して、むやみと自己のモノサシを他人に当てはめないこと、他人と違って不安にならない態度を養いたい。この点においては、社会科との連携も考えられるし、実習なり、外国人との交流活動が実現できれば最良である。

以上、日本語教育の中で扱われている項目のうち、国語教育に生かせるものについて、私見を述べてみた。実際の教室活動での試行とともにご批判いただければ幸いである。

#### 4. おわりに

渡部昇一氏は、より質の高い国語教育の実践のため、英文で修士号をとる際に、国文の学士をとるような制度を提唱されている（「二科兼学のすすめ」）<sup>(7)</sup>。理想としては、たいへん素晴らしい提言であるが、まだそのようなカリキュラムは、実現されていない。したがって、現時点において、国語科教員志望者が「二科兼学」を実践しようとする、一方の学科を終えてから、二つめの学科に在籍して、それぞれの教科の教員免許を取得する必要がある。これは、時間と費用の面において、誰でも実行可能とは言い難い。

そこで、渡部氏の説く「二科兼学」の主旨を実現するには、次の方法がより現実的であると考えられる。すなわち、現在の国語科教員養成課程に、日本語教育関連の科目を設定するか、「国語科教育法」の講義の中で、日本語教授法も取り扱うのである。これは、教室の「国際化」が進んでいる現在<sup>(8)</sup>では、急務とも言うべき方策であろう。

そして将来にわたって、実際の国語教育の現場に身をおく方々には、日本語教育研究の成果をたえず注視し、日々の実践の中で活用・展開をはかるようお願いしたい。それは、より良い国語授業への変革を可能にし、さらに進んで日本語研究を深める契機をもたらすに違いない。

注1. 関 正昭氏編著『日本語教育史』（私家版 1990.3）参照。

2. 政治家がしばしば「日本は単一民族国家」と失言して物議を醸してしまうのは、言語的にはほぼ日本語単一であるという状況が主たる原因だと思われる。彼らとて日本列島の先住民族であるアイヌの存在や、在日コリアンに代表されるオールド・カマーにも思いが至らないわけではなかろう。が、そうした民族的に多様性を示してくれる人々の日常的な言語生活においては、日本語が大部分を占めているのが現実なのである。

3. 国家と民族言語の関係は、以下のように分類できる。

- ① 1言語が他国家で用いられる場合……ドイツ語（ドイツ、オーストリア、スイスなどで公用語）
- ② 1言語がある1国家だけで用いられる場合……日本語と日本、スウェーデン語とスウェーデン
- ③ 多言語が1国家で話される場合……中国（旧ソ連、旧ユーゴスラビア）

世界的には、③のような多言語国家が多い。

4. 本務校のほか、非常勤校の学生諸君の協力を得た。

5. 明治期の手紙の教科書には、文字とも美しく立派なものが多いが、現行の日本語教科書の中では、『日本語の手紙の書き方』（The Japan Times 1992.11）が初歩的な注意も施され、理解しやすく出色である。

6. たとえば、牛の名称は、英語の場合、cow（雌牛）、bull（雄牛）、ox（去勢牛）、calf（子牛）、cattle（牛の総称）など語種が多く、それぞれが一語で独立している。そこには、牧畜・肉食の文化が反映している。反対に、英語ではrice一語で済ましてしまうところを、日本語では、イネ・コメ・メシ・ゴハン、さらにライスと区別する。農耕・稲作の文化の投影である。

7. 渡部昇一氏『教養の伝統について』（講談社学術文庫 1977.11）P.168

8. 1991年度の文部省調査では、日本語教育の必要な学童の数について、以下のよう  
な数字が示されている。

- ・日本の小中学校に通う外国の子ども 7万2千人
- ・日本語が不十分で指導の必要な子ども 公立小学校 4000人  
中学校 1500人
- ・その子らの母語……
  - ポルトガル語 35%、中国語 30%、
  - スペイン語 11% 次いでコリア語、
  - ベトナム語、英語など……計43言語

#### 〔参考文献〕

京極興一氏『「国語」とは何か』（東宛社 1993.2）

雑誌『日本語論』1994年 6月号 特集「『国語』か『日本語』か」

雑誌『日本語論』1994年 7月号 特集「国際化する日本語」

〔付 記〕本稿は、平成6年度県民カルチャー上田女子短期大学開放講座（1994.10.22）における講義（「日本語教育と国語教育の接点——明日の言語教育をつくる——」）をもとに稿を起こしたものである。

（おおはし あつお／日本語教育研究会顧問）